

Title	Walter Jung : Grammatik der deutschen Sprache
Author(s)	武田, 昌一
Citation	ドイツ文学研究 (1968), 16: 22-29
Issue Date	1968-03-23
URL	http://hdl.handle.net/2433/184923
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

一つの文法書

—Walter Jung: Grammatik der deutschen Sprache.
Veb Bibliographisches Institut. Leipzig 1966. —

武 田 昌 一

Walter Jung の „Kleine Grammatik der deutschen Sprache” が今世紀の30年代から、それ迄のどちらかと言えば規範的で杓子定規的な文法記述とは異なる理論に支えられて世に出たのは1953年のことであった。280頁のこの小冊子は従来の所謂学校文法の構成を改めて、Satzbau から説き起し、文(Satz)とは何か、Satzglied とは何かを問い、次いで Satzglieder の形態と機能を論じ、単文から複文へと論及し、そこで始めて詞論に入り、最後に Wortstellung 論で締めくくっている。しかし参照された文献は Karl Boost, E. Drach, Ingrid Dal 等の外は Otto Behagel, Hermann Paul, L. Sütterlin というような古い(1910年代から1920年代に及ぶ)ものが多かったのであって、既成観念を払拭しきれないでいる点が散見されるのは、重要な Satzglied である Prädikat の概念規定を探りあげて見てもうかがえるのであって、それは „Hans ist tüchtig. Seine Frau heißt Gretel.” という文型で ist, heißt を従来通り Kopula (--Satzband), tüchtig, Gretel を Prädikativum と名づけ、Kopula には殆んど意味内容がなく、その価値は Satzglieder を結合する働きにあるとしているのを見てもわかるであろう。この文法書は、言語を ergon としてではなく、energeia として把握しながら、その中に存在する約束を一つの概観と規則にまとめ上げるよう努

一つの文法書

力を積み重ねている Germanisten の業績を採り入れた新しい型の文法書が出るまでの過渡的なものであったと言えるだろう。

これらの Germanisten の著書、例えば J. Erben: Abriß der deutschen Grammatik. 1959, W. Admoni: Der deutsche Sprachbau. 1960, E. Riesel: Stilistik der deutschen Sprache. 1949, K. Lindgren: Neue Strömungen in der deutschen Grammatik. 1960, H. Brinkmann: Die deutsche Sprache. 1962, H. Glinz: Der deutsche Satz. 1957, Die innere Form des Deutschen. 1961, W. Flämig: Zum Konjunktiv in der deutschen Sprache der Gegenwart. 2. Aufl. 1962, P. Grebe: Grammatik der deutschen Gegenwartssprache 1959, W. Schneider: Stilistische deutsche Grammatik. 2. Aufl. 1959.等を渉獵して、編纂方針は前述の“Kleine Grammatik der deutschen Sprache”を踏襲しながらも質量共に面目を一新して完成されたのが „Grammatik der deutschen Sprache”である。これは単に „Kleine” という形容詞を省いた、簡単に触れた個条を補足し、長々と説明したというような安易な態度に止まっているのではなく、最近の学説に用心深く拠っているのである。

記述の順序は旧著と同様だと言うことができるが、頁数から言えば殆んど倍の510頁余に上り、新たに付け加えられた事項もある。造語法はその一例であり、方法としては Zusammensetzung, Ableitung, Präfixbildung を挙げ、現代における造語法の諸傾向に説き及んでおり、また発音と Satzintonation に就いて簡明な解説を与え、これに関連して Umgangssprache と Hochsprache, Dialekt と Mundart の実体と、それぞれの関係を分析している。

文の成分 (Satzglieder) に就して言えば、これには Erben の主張す

るように幾ら細分しても余り意味のな事柄であろうが、本来の成分を強調したり制限したりする働きを持つ Rangier-Glied——Schulz-Griesbach の命名によれば Rangattribut——を新たに加えている。例えば „das Wetter *allein*, *besonders* sein Bruder, *schon* gestern” では付加語的であり, „Tritt *nur* ein!” では状況語的であり, また „*Auch* ich kenne ihn.” では接続詞的であるとしている。この点では Duden が *kaum*, *keineswegs*, *überaus*, *auch* 等の Modaladverbien だけを採り上げて、これらが付加語としての機能を持つことを指摘しながらも、付加語という成分(詳しくは Gliedteil)と自由に差し入れすることができる freie Umstandsangabe の双方にまたがるものとしているのに止まっているのに反して明確な定義を与えているものと言えるであろう。

扱, Duden, Griesbach, Erben 等がひとしく文の基幹を形造る成分 (Satzglied) として挙げている述語 (Prädikat) に就いては、前に述べた Kopula (Er *ist* [*wird*] Kaufmann.) という概念が姿を消しているのは以上三者と軌を一にしている。sein, werden, bleiben, heißen 等は、Prädikat として働く他の動詞(所謂 Vollverben)と同様に取扱われるべきものであるとする。それは先ず時称を表わすからであり、Jung はその理由として他の動詞と同じく構文の法則に従うからであると言う。叙述分では2番目の位置を (Kernstellung → Er *ist* Lehrer in Berlin.), 副文では文末の位置を (Spannstellung → da er Lehrer *ist*.), または所謂複合時称では枠 (Rahmen) を構成する (→ Er *ist* Lehrer in Berlin *gewesen*.). 次にこれらの動詞は単に成分をつなぐ無意味なものでは決してないということは同じ型の文で、これらを入れ替えて見れば自ら明らかになるとして、次の例を挙げている。

Fritz *ist* dein Freund. Fritz *bleibt* dein Freund. Fritz *wird* dein Freund. Fritz *scheint* dein Freund. (S. 36)

それならばこの „Fritz *ist dein Freund.*” という文における „dein Freund”, 或は „Freund” はどういう成分と見做すべきであろうか。それは勿論 *prädikative Ergänzungen* の一つであろうが, Griesbach が *Prädikatsnominativ* と, また Duden が *Gleichsetzungsnominativ* と名づけているようには特別な名称は与えていない。尤も Duden と Griesbach のつけた名は括弧つきで挙げてはいるが。同様な文型 („Der Boden war *hart.*”) に見られる形容詞 *hart* は Jung に従えば *Prädikatsadjektiv* であり, 成分としては *Prädikatsergänzung* の一つだが, 彼はここでも Duden が *Umstandsergänzung* のうちの *Artergänzung* だとしているのとは違い特記することはしていないのである。

以上は *Der deutsche Satzbau* という第一章の第三節 „*Satzglieder*” の冒頭で述べられている所であるが, 引続いて主語, 目的語, 所謂副詞規定等の成分を論じて, その意味と形態を解明している。これらの成分を構成する動詞, 名詞, 副詞, 代名詞等は「品詞論」の一章にまとめられ, 時に応じて歴史的な記述を交えながら主として *synchronisch* な概観が与えられている。

そのうちの一節「動詞」の中で目に止に止まった二三の点を次に挙げてみることにしたい。

Flexionsarten に従って Jung は強変化, 弱変化, 不規則変化の三つのグループに別けているが, 強変化の特徴は転音であり, 弱変化動詞は語幹が常に同一であり, また不規則変化動詞には転音の外に子音も変化するものが含まれるとする。これには *gehen, stehen, sein, tun,*

brennen, kennen, nennen, bringen. 等の外に所謂話法の助動詞（これについては Klaus Welke: Untersuchungen zum System der Modalverben in der deutschen Sprache der Gegenwart. 1965. を挙げておきたい）があるとする。なお意味によって変化の異なるもの（quellen 等）、強弱両様の変化をするもの（glimmen, hauen; backen 等）を付記して、それらの今日の用法を挙げている。

また動詞の様態（Aktionsarten）については、すべての動詞が明確に一つの様態に帰属するとは限らないと断っておいて、継続態、完了態等反復態等について例証し、この様態という現象が完了時称に於いて助動詞 sein と haben のいずれが用いられるかにかかわる所が多いことを指摘している。

この sein と haben について言えば、haben をとるものには継続態の動詞が多く、sein をとるものは完了態の動詞であるという。これまで所謂運動や場所の移動を示す動詞（Verben der Bewegung, Verben der Ortsveränderung）が haben を助動詞としてとるときは行為そのものをあらわし、sein を選ぶときは場所の移動を表面に出すというように説かれて来たが、Jung は haben の使用は主語の Betätigung を浮び上らせて、これらの動詞を他動詞化し、sein を使えば事象（Vorgang）そのものに重点がおかれ、その場合は自動詞にとどまるとして次のような例を挙げる。

Er *hat* (den Wagen) gefahren. Er *ist* (im Wagen) gefahren.

Er *hat* (drei Stunden) gesegelt. Er *ist* (nach Rügen) gesegelt.

このことに関して Duden は、運動を表わす動詞にあっては今日では動きの中での変化、又は場所の変化の方がより強く感じられる傾向にあるので、sein を助動詞としてとる方が多くなったと、見方の変化をその原

因としている(Wir sind den ganzen Tag geschwommen〔geklettert〕)。また fahren と *fliegen* は haben をとるときと sein をとるときとは二義的な意味で異なり、前者では誰かが自らハンドルを握り、後者では乗客であることをあらわすし、(Duden: Bd. 4. S. 99f., Duden: Bd. 9.), reisen では専ら sein を助動詞とするようになっているとしている。

時称の用法のうち、「未来」についての Jung の考え方を見るならば、彼は Erben, Brinkmann, Porzig たちの解釈に立って、それは現代の独逸語ではもはや話法的な性格しか持たなくなると断定して、そのばあい主語の人称が決定的な役割を演じているのであって、予言、強い要望現在にかかわる推量を表示すると説くが、これは Duden も同じである。

現在完了と過去(Imperfekt, Präteritum)の用法上の違いは我々異邦人には実感として把握し難く(これは、W. Schneider, Weber〔Das Tempussystem des Deutschen und des Französischen〕, Käte Hamburger〔Die Logik der Dichtung〕を読んでも隔靴搔痒の感があるのだが) Jung の個条書めいた説明でも同じことである。

次に人称代名詞のうち es については比較的に要領よくその機能をとらえていると言えよう。所謂形式的な、文法上の主語としての es には様々な文法学者が様々な解釈を下して、帰一する所を知らない有様だが Jung は、この「非人称的」es は主語を後置するためのものであると一応は言いながら »Es gingen drei Jäger wohl auf die Pirsch. (Uhland)« という文をあげ、この es は文を導入する副詞 einst 或は da に近いと判断して、「過去、現在、未来における継続の様態を示す」という W. Admoni の説を紹介している、即ち文体的効果を持つとしているのである。序でに言えば、この es については毒舌家 Karl Kraus の „Die

Sprache' に収録されている „Psychologie und Grammatik” にかにも作家らしい独創的な、或はまっとうな見解が披瀝されていて教えられる所が多いことを断っておきたい。Kraus は、 „Der Tanz beginnt” „Ein Tanz beginnt.” と „Es beginnt ein Tanz.” という三つの文について、第一の文は既に紹介されているダンスについて、それがこれから始まることが述べられ、第二の文では彼の見方によれば „ein Tanz” は Prädikat であって、主語は隠れている、つまりこの文は „Es wird getanzt. と等価なのであって、これから始まるのはアクロバットであるかも知れないと言い、第三の文は、これら始まるものは踊り „Tanzen” であって、ほかのことが始まるかも知れないのだ)と言っている。

19世紀末から小説で盛んに使われるようになった „erlebte Rede” (体験説話)には Duden では一言といてよい程簡単に触れられているだけだが、文法的に識別すべき手がかりとしては直説法、過去三人称、それに未来を指示する副詞が過去の文脈の中で使われていることぐらいであるこのerlebte Redeを Jungも考察の対象としているが、erlebte Redeでは Erzähler は登場人物と一体化して、その話なり思想なりを引用するのであって、使用の動機は同情とか確信、或は嘲りや皮肉であると説いている。これを Stilmittel であるとする彼は文法上の特性については言及していない。なお erlebte Rede の実体に触れるためには Thomas Mann と Robert Musil の体品を材料として適確な証論を展開している Werner Hoffmeister : Studien zur erlebten Rede bei Thomas Mann und Robert Musil. 1965. が読まれるべきであろう。直截な概念規定とその多様な形態と複雑微妙な文体的効果を我々は本書から教えられる。

Wortstellung に関しては、Drach の叙述文では文頭は Ausdrucks-

一つの文法書

stelle であり、文末は Eindrucksstelle であるとする考え方に依っているが、独逸文ではある文が持つ緊張(Spannung)は文末で解放されるのであって、伝達価値の大きい成分ほど文末に近づくといい、枠構造についても詳細にその法則性を総括しているが、現代では枠の外にはみ出る成分が多いことに眼目して、所謂括弧の外に出る現象 (Ausklammerung) は例外ではなく、Eindruck を指向する自然な流れだと、規範的な態度をここでも捨てている。

Duden に比較すれば、全体の構成がうまく出来ていて、疑点を平均的に洩れなく配分し、行きすぎを警戒して新しい術語の使用は控えめにしている点、独逸語の文法全般をおおう使い易い実用文法と言ってよいであろう。